特集

1600年代に起こったイングランドの疫病大流行をCOVID-19と照らし合わせて
―物語作者ダニエル・デフォーが書き記した回想記をもとに―

織田 稔　元関西大学

1. はじめに

2020年8月現在、日本中が新型コロナウイルスの蔓延流行で大混乱、毎日毎日の感染者数・発症者数・死亡者数の速報に一喜一憂の毎日、現に東京でも、非常事態が公式に宣言され、不要不急の外出の自粛が要請され、飲食店のほか特定業種が一定期間の営業停止を命ぜられ、各所でコロナ感染予防のロックダウン（lock-down「閉鎖・封鎖・出入りの禁止」）が実施されている。しかもこのコロナ禍の蔓延は日本だけの話ではない。EUでも、アメリカでも、中国、ブラジル、アフリカでも、世界中で、猖獗を極めている。今日（2020年10月1日）は、トランプアメリカ大統領のコロナ感染（陽性反応）が明らかになり、報道陣は大忙しである。これが高死亡率のコレラやペストだったら、どんな大混乱だろうかと恐ろしくなる。

さらにさかのぼれば、エボラ出血熱の流行というのもあった。世界保健機構（WHO）が2014年8月8日に緊急事態宣言をして以来世界を震撼させたエボラ出血熱による死者が、2014年12月21日の新聞報道によれば、西アフリカのギニア、リベリア、シエラレオネの3ヵ国で7,373人に達したという。世界保健機構による19日付の最新統計である。エボラ出血熱は、患者の血液や汗などの体液に触れることで感染する、極めて致死率の高い伝染病である。読売新聞が選んだ、2014年の世界の十大ニュースの第一位もエボラ出血熱であった。だが1665年に大流行のロンドンのペストでは、これとほぼ同数の7,000余人の犠牲者が、ピークの9月中旬にわずか1週間で毎週出ているのである。そのすさまじさは想像に難くない。

『ロビンソン・クルーソー』ばかりが名高いダニエル・デフォーだが、彼にはもう一作、ペストの大流行を扱った名作がある。*A Journal of the Plague Year*である。デフォーの名は、『ロビンソン・クルーソー』を彼が書かなかったとしても、この一作によって英文学史に残ったであろうと激賞された作品である。

定冠詞付きで*the Plague Year*と言えば、ペストが大流行したロンドンの1665年のことである。「大震災」と言えば、大正12年9月1日に起こった「関東大震災」を指すようなものである。デフォーがこの作品を刊行したのは1722年3月17日だが、その一ヵ月前の2月8日に*Due Preparations for the Plague as well for Soul as Body*というダイアローグ形式が中心の家庭教訓書を出している。これは直近の1720年に、マルセーユを中心にフランス南部でペストが猖獗を極めているとのニュースに触発されて、急遽上梓された作品である。時流に乗って売れ行きを伸ばそうという商売根性丸出しの出版であったが、ペスト襲来のニュースに怯えるロンドン市民に必要な情報を提供したいという善意の刊行でもあり、感染症一般に通用する心構えを開陳するものでもあった。その概略を紹介すれば以下のようである。

図1：ダニエル・デフォー：Jure Divino, 1706の口絵
出典：James Sutherland, DEFOE.（Methuen, 1950）

2. 国王の即位と疫病の流行

イングランドでは、国王が代わるたびにペストが流行るという、奇妙な現象が続いていた。エリザベス女王死去の後のジェームズⅠ世即位の時（1603年）も、そのジェームズⅠ世の後のチャールズⅠ世即位の時（1625年）もそうであった。だから、チャールズⅡ世の即位（1660年）の場合も、同じことが起こるのではないかという危惧が、絶えず人々の心の片隅にあった。

2.1 ジェームズⅠ世即位の時（1603年）

1603年3月24日、70歳のエリザベス女王は、みずからは王位継承者を指名することなく、45年に及ぶ統治を終えた。二日後の3月26日にその報に接したスコットランド王国のジェームズⅥ世は、直ちに31日、エジンバラのマーケットクロスで'King of England, Scotland, France, and Ireland'への即位を宣言、4月5日ロンドンに向けて出立、5月7日にはロンドン郊外に到達するという迅速な対応であった。

全スコットランド宮廷関係者の大挙南進とそれを迎える大

群衆のロンドンからの北上、この人流・物流の突然の激化は、当然、ペスト菌の活動の拡散・深刻化を伴うものであった。

1603年の初頭から、ゼロあるいは一桁の前半で推移していたロンドンのペストによる死者数が、3月に入ってからは死者が途切れることなく続くようになっていた。そしてエリザベス女王死去の3月24日から、ジェームズVI世（イングランド国王としてはI世）のロンドン到達の5月7日までの間に二桁に上昇する。当時ロンドンは、ジェームズの入洛に伴い人間の出入りが激しく、市中は雑踏を極めたと思われる。

5月11日ジェームズは、ペスト禍を避けてロンドン塔に入ったが、シティに出ることなく三日後にグリニッジに移る。しかしペストの死者は毎週着実に増加を続け、戴冠式の祝賀行事どころではない事態になる。5月末からは毎週30人を超え、6月中旬には50人を突破、6月最後の週には遂に三桁に達し、爆発的な蔓延が始まる。

不要な市民の移動を制限し、不急の集会・祝祭の延期を通達し、国王は6月30日にウィンザーで王妃と皇太子に合流、7月23日にやっとハンプトン・コートを経てホワイトホールに到着する。そして悪天候の中、7月25日にテムズ川を下ってウェストミンスターに上陸し、セントジェームズデーのこの日、やっと戴冠の式にこぎつける。水路と陸路を乗り継いでロンドン市民の沿道殺到を防いだうえでの式典であった。しかしこの時、ペストの死者はすでに四桁に達し、そして8月中旬に一挙2,713人の死者を記録する。このあと6週連続で2,000人台の死者を出し続け、9月の第1週にはピークの3,035人がペストで命を失ったのだった。ペストの死者が3桁に落ちたのは10月の第3週、二桁になったのは12月の第2週で、冬の到来まで待たねばならなかった。だがその後も、この年の間は死者が50人を切ることはなかった。

1603年全体（1602年12月23日～ 1603年12月22日）で言えば、ロンドンのペスト死者は30,578人（ウェストミンスター、ランベスなどの周辺部を入れると35,104人）に上った。当時ロンドンの人口が25万人を上回ることはなかったと推定されるので、8人に1人の住民がこの一年で、それも7月から11月の5ヵ月に集中してペストの犠牲になったのである。

3月末のエリザベスの死去から7月末のジェームズI世の戴冠式まで、王位継承に伴う内政の空白がペストの蔓延防止に対するた行政の初動の遅れを招き、十分な対応が執られないままに、すべてが後手に回ってしまったことを数字は示しているようだ。

2.2 チャールズI世即位の時（1625年）

このジェームズI世が死去したのは1625年3月27日、イングランド統治23年目、享年57歳であった。嫡子ヘンリーは1612年に死亡していたため、その王位を継承したのは次男チャールズで、彼の場合は父ジェームズの時のような継承者をめぐる駆引きや混乱はなく、新国王による統治へとスムーズに移行するはずであった。

しかし、ロンドンでは、1625年3月第4週にペスト死者が8人を数えるだけであったが、その内の7人が同じ1つの教区St. Botolph's-without-Bishopsgateの住民であった。だがこの教区はシティ北東のロンドン・ウォール外縁の教区で、またシティ中心部からも遠く離れた教区だったということもあり、国王ジェームズの死去という一大事に紛れて、人々の注意がペスト発生のことに十分及ばなかったのかもしれない。だが実際には、ペストは少数でも集中して発生した場合（クラスター）の方が多数の散発の多数よりも危険な兆候であった。4月、5月とペストの死者数は確実に増え続け、6月入ると毎週1.5倍に近い増加となり、6月最終週には390人を記録する事態となった。

このような状況であったから、ジェームズI世の葬儀は何とか5月7日に済まされたものの、新王の戴冠式の祝賀行事は、新国王チャールズと王妃ヘンリエッタ・マリアをシティに迎えて盛大に執り行われる予定であったため、10月まで延期のやむなきに至り、それでなくても貴族や裕福な商人たちは、5月と言わず4月中にも早く安全な地方に疎開したかったところを、王妃の出迎えのため足止めを食らわされていたのだった。

他方、議会の方もジェームズI世の体調不良のため、前年の24年11月2日から開会が延期され、そして彼の死去により4月20日に再々延期されたまま、結局、議会が召集されたのは6月18日であった。しかし議会は、チャールズの要望する対スペイン戦の戦費支出を承認しただけで7月11日に閉会した。しかし、そのとき議会に残っていたのはごく少数で、ほとんどの議員はすでにロンドンから脱出して不在だった。それもそのはずで、7月14日の週間死亡者速報は、埋葬者1,741人のうち1,004人、実に4桁のペスト死亡者を伝えていたのだった。

そして彼らは賢明であった。次の週からペストの死者は更に増え、7月末からは3,000人台に達し、8月第2週からは連続3週間4,000人台を記録した。ピークの5週間の死者は19,999人、ジェームズI世即位の1603年のピーク時5週間の死者13,824人をはるかに超える高い数字であった。そしてこの時も、国王の死去から新国王の即位にいたる政治の転換と空白が、ペストに対する防疫対策の迅速な発動を遅らせ、結果として中世の黒死病（1348–1349）以来の多数の犠牲者を生むことに手を貸すことになったと、庶民が感じたとしても無理からぬことであった。だから1660年チャールズII世が王政復古で王位を継承した時も、ペストの流行に対する微かな惧れを心の奥底に抱いていたとしても当然であったのである。

3. 王政復古（1660年）：機を窺うペスト

3.1 チャールズII世の王位継承の前後

1660年5月26日にフランスに亡命中だったチャールズはドーバーに上陸し、29日にロンドンに入った。戴冠式は1661年4月23日であった。人々は新国王の即位とペストの大流行という不吉なジンクスを忘てはいなかったが、1660年から1年たち、2年たち、3年たってもその兆しはなく、年々のペスト死者はむしろ減少の傾向にあった。人々は王政復古の祝賀気分に気を許し、宮廷の奢侈と放逸の風潮はロンドン市民の間にも広がり始めていた。確かに、ペストによる死亡として報告されていた埋葬者の数は、1659年には36人まで漸増したものの、1661年からはむしろ減少の傾向にあり、1664年には一桁の僅か5人にまで低下していた。

だが実際は海峡を挟んで対岸のネーデルランドで、1663年

からペストが流行し始め、アムステルダムでは1663年に9,752人、1664年には24,148人、実に34,000人もの犠牲者がこの2年間に出ていたのだった。ロンドンにも、オランダでペストが猛威を揮っているという噂が広がり、1664年9月には市民を不安におとしいれていた。

その不安がやや薄れた11月から12月にかけて、ロンドン郊外のセントジャイルズ・イン・ザ・フィールズ教区でフランス人と思われる2人の男がペストで死亡したことが確認された。このペストのロンドン上陸は衝撃であった。だがこの時の行政の対応は用心深く的確なもので、ペスト患者発生に対する初動の対応としてはほぼ完璧であった。複数の医師を派遣して死因を確かめ、その結果を正式ルートを通して当該部局に報告、「死亡者統計週報」（Bill of mortality for a week）に「ペストによる死者数2／ペスト汚染教区数1」（"Plague 2. Parishes infected 1"）のように開示された。だが12月末にさらにもう1人、その家の者がペストで死亡し、人心の動揺は更に高まったけれども、その後7週にわたってペストの死者の報告がなかったので、人々は、疫病の懸念はなくなったと楽観し、安心していた。

3.2 監視の緩み：不気味な潜伏

ところが2月も14日頃になって、同じ教区の別の家で1人が同じ症状で亡くなった。これで人々の不安が一気に高まり、感染を恐れて人々は発生地の近辺は通るのを避けた。そして「死亡者統計週報」が示す1664年末以来の不自然な死亡者数の急増に、あらためて疑念を持ったのだった。各週の死亡「埋葬者数」が1月以降に、毎週50人、100人と異常な増加を見せていたのに、「死亡原因がペストの死者数」は2月第2週の1名を除きずっとゼロのままであるのはおかしいではないか、という疑心暗鬼であった。（Defoe, *A Journal of the Plague Year*: 4）

しかしこのような異常な埋葬者数の増加も、3月から4月へと大きな変化がなく小康状態が続き、人はその異常にも慣れてしまう。だがこれが容易ならざる事態であったことに気付くのは、4月の最終週からOf the plagueの欄に実数が入り、それが5月中頃に2桁になってからであった。そして6月に入ると、ペスト死者数は毎週112人、168人、267人とうなぎのぼりに増大、ロンドン中がパニックになった。そして人々を恐怖に陥れたのは死者の数だけではなかった。その蔓延の急速な広がりが人々を一層の恐怖に駆り立てた。ペスト死者を出した教区数が、死者の数と競うように急上昇してきたのである。

5月が終りに近づくにつれ、ロンドンシティ外教区（Out-parishes）とウェストミンスターからロンドン・ウォール外縁教区（London Without the Walls）へと拡大し、そして6月中旬にはロンドン・ウォール内（London Within the Walls）の教区にも死者が出始める。7月にはシティ周縁部で死者が急激に増大、汚染区域も毎週10教区を上まわる勢いでロンドン全域に広がっていった。ペストの襲来に対する初動の防疫対策で後れを取り、爆発的な蔓延が目前に迫って来ていた。

4. 1665年夏：増え続ける死者

4.1 ペストによる死者の急増

7月上旬にほぼ500人だったペストの週間死者数が、中旬には1,000人を超え、最後の週にはほぼ2,000人超へと10日ごとに倍増していく。そして8月に入って益々騰勢は募り、最終週では6,000人に達し、以後、毎週6,000人超の人がペストで死亡し、9月中旬にピークの7,165人の死亡が報知される。

4.2 追いつかぬ遺体の処理

ペストの蔓延で死者の急増が激しい教区では教会の墓地が墓であふれ、埋葬場所に事欠く教会が続出する事態となった。仕来りどおりの正式な埋葬を教会墓地で行なうことは物理的にも不可能になり、新たな墓地の確保も経済的な負担を教区民に強いることになり、結局、墓の上にまた墓を作らねばならぬ教会もあった。

墓地だけではない。死者の急増で棺桶の供給が間に合わず、材木までが払底して高騰し、埋葬の費用を払えない者も多く、聖ブライド教会では、8月、9月、10月の3ヵ月の間で埋葬費の支払いがあった葬儀は17パーセントに過ぎなかったという。このような状況から、遺体が教会に安置されたままになったり、極端な場合、遺体が路上に放置されたままになっていたりすることもあった。迅速な遺体の埋葬こそペストの蔓延阻止の第一歩なのだが、各教会にとって墓地の確保が今や大難題であった。

しかし、墓地の不足は深刻であった。聖ボトルフ・オールゲート教会では、この年、平年のほぼ7倍にあたる4,926人の死亡者を記録したが、そのうち1,114体を、ベスレヘムに新設された新教会墓地（New Churchyard）に埋葬を依頼しなければならなかった。だがこの集団墓地もすぐに満杯になり、バンヒル・フィールズに次の集団墓地が設けられ、さらにソホー・フィールズのペスト病院にも埋葬地が作られた。

4.3 ピットへの投げ込み ― 死体の埋却処理

『疫病年回想記』の筆者とされるH.F.が訪れた、オールゲート（Aldgate）教区の大型遺体埋却溝（great pit）も、このような新教会墓地（New Churchyard）の一つであった。8月上旬になってオールゲート教区でも一段とペストが猖獗を極め、遺体収集の荷馬車が忙しく巡回し、8月の下旬には週に200～400人の遺体を集め、50体から60体を一つの墓穴に埋葬していたがとても間に合わなくなる。シティ当局からは、遺体は6フィー

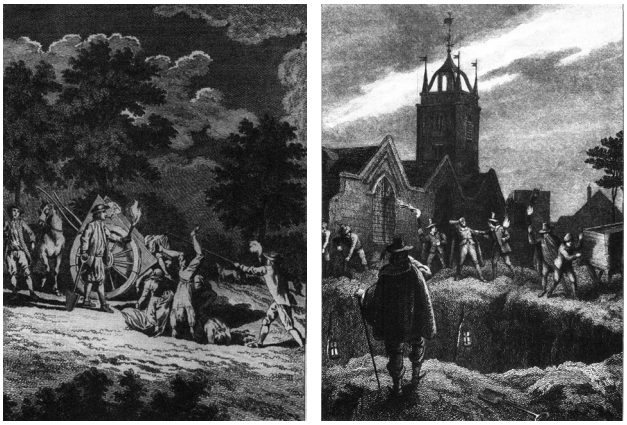

図2：死体の搬送と埋葬（投げ込み）
出典：Stephen Porter: 49 & 68.

ト以上の深さに埋めることという通告があり、9月初めにこの超特大の遺体埋却溝を用意することになったのだった。

H.F.の言うように、これは溝（ピット）ではなく、まさに堀（ガルフ）であった。この超大規模の共同埋却溝は9月4日に完成し、6日から埋却が始まった。だが20日までに1,114人の遺体が投げ込まれ、わずか2週間で地表まで6フィートに達し、そこでまた埋め戻さなければならなかった。H.F.が、この巨大な墓穴に死者が夜間に埋却される様子を見に出かけたのは、その10日前の9月10日であった。（*Journal*: 60）

> 警備の男は、埋却地に入ることを許してくれたが、「埋却された死体の山は見ないほうがよい」と説得する。H.F.は一瞬怯むが、丁度そのとき「死人馬車」（a Dead-Cart）が死体を運んで入ってきたので、その後について埋却墓地に入る。そしてそこで彼が目にしたものは、お祈りの言葉一つなく無造作に穴の中に投げ込まれていく無残な妻子の遺体と、それを身をよじて嘆き悲しむ夫の姿だった。それは警備の男が言ったように、主のみもとに召される死者との厳粛な別れとはとても言えない残酷な光景であった。

わずかのリネン、襤褸、布切れも、投げ込みと同時にめくれ落ち、慎みも恥じらいもなく丸裸のまま死体の山の一部と化す。しかし彼らにはもう、そんなことはどうでもよい。今は仲良く肌寄せ合って埋もれるのだからというH.F.の感慨には、感傷を排した強烈な皮肉がある。そして、これもやむを得ぬことだった。これだけ多くの人間に死なれては棺桶の手当てもむずかしかろうとは、デフォーの目は冷徹で、その筆は辛辣である。

5. ペストの恐怖：脅威の伝染力

5.1 腺ペスト

確かに、国王、政府、宮廷のペストに対する危機感の欠如や市民の民生に対する無責任な傍観者的態度、そしてペスト汚染国オランダとの無謀な交戦など、いろいろの原因で防疫対策の初動の遅れ、検疫体制の破綻、蔓延防止策の遅滞があったにせよ、毎週首都で5,000人を超える死者が出るほどまでにペストの猖獗を許してしまったということは、それだけの強い伝染力がペストという疫病にはあるということでもあろう。

ペストに3種類あることが現在では確認されている。その症例の4分の3は腺ペスト（bubonic plague）と呼ばれるものであり、感染後36時間から10日、平均6日で発病、死亡率は60～80パーセントだという。腋下や鼠蹊部、頚部などのリンパ腺が腫れ上がり、激しい痛みと嘔吐をもたらす。

もう一つは肺ペスト（pneumonic or pulmonary plague）と言われ、大体5分の1がこの種類だと言う。普通のインフルエンザと同じように、咳やくしゃみで病原菌がばら撒かれ、人から人に感染する。リンパ腺が腫れるよりも早く、肺にまで菌が入り込んで増殖するとこの肺ペストになり、死亡率は95ないし100パーセントである。

最後の一つは敗血性ペスト（septicaemic plague）と呼ばれ、高度に汚染されたペスト患者の血を吸った蚤や虱によって、人から人に伝染する。血液に入って増殖し血流を各所で阻害することになれば、数時間内に発症、感染後一日以内で死亡することがしばしばで、死亡率百パーセントである。症例は稀だが罹れば助からない。

腺ペストは、イエネズミまたはクロネズミに寄生する蚤がペスト菌に感染し、その蚤が人間にたかって血を吸うとき、その唾液に付いてペスト菌が人体にはいり、リンパ液とともに体内に広がり、リンパ腺にぐりぐりができ、悪寒、嘔吐、頭痛、肺の炎症を引き起こし、皮膚に鉛色の斑点が生まれ、胸部に赤黒い痣が現れる。そうなると、もう恢腹は絶望と言う。デフォーの『疫病年回想記』に次のようなエピソードが語られている。（*Journal*: 55–56）

> あるご婦人に一人娘がいて、年は19歳ぐらいで財産もかなりあった。その家に住んでいたのはこの二人だけだったのだが、何かの用事があって、何の用事だったか忘れたが、お嬢さんとお母さんと召使いの女の子の3人で出かけることがあった、家は釘付けにはなっていなかったので。ところが家に戻って2時間ほどして、お嬢さんが急に気分が悪いと言い、15分もすると食べたものを吐き、頭がずきずき痛み出した。ベッドが暖まるまでの間に、お母さんがお嬢さんの衣類を脱がせ、いざベッドに彼女を寝かせようと身体にローソクの灯を当てたところ、太腿の内側にあの忌まわしい斑点が目に入り茫然自失、思わずローソクの灯を床に投げ出し、キャーッと凄まじい悲鳴を上げ、恐怖に魂を奪われて卒倒、ようやく生気が戻ると今度は家中を気が狂ったように走り回り、私の聞いたところでは、お母さんがまたもとの自分に完全に戻られることはなかったということだった。若いお嬢さんのほうはと言えば、もうその瞬間から命の絶えた屍だった。

これは腺ペストの典型的な症状である。ペストの発症は、ペスト菌に感染した蚤に噛まれることによるが、ペスト患者が咳やくしゃみをして撒き散らすペスト菌によっても、人から人へと伝染する。また布や古着に付着したペスト菌によっても感染するところが恐ろしい。

5.2 敗血性ペスト

だからペストの感染予防には、蚤や虱に噛まれれないように注意するだけでなく、感染者との直接の接触も、もちろん避けねばならなかった。汗、息、その他ペスト患者が排出するものは、すべてペスト菌に汚染されている危険があり。近距離での会話や応対も避けるのが賢明であった。健康そうに見える人でもまだ潜伏期間中で、症状が表に出ないだけの保菌者ということもあった。

『疫病年回想記』のH.F.は、次のような残酷無情な出来事を伝えている。（*Journal*: 71–72）

> ロンドン・ウォールの北西隅のオールダーズゲート・ストリートの自宅を家屋封鎖された男が、その封鎖を破ってイズリントンまで歩いて来たが、泊めてくれる酒場宿（タバーン）がない。違法脱出者に健常証明書が下りるはずがなく、今もその名が地下鉄の駅名に残るエンジェル・インで断られ、ホワイ

ト・ホースでも断られ、パイド・ブルに来た。「リンカンシャーまで行くのだが、一晩泊めてくれないか、このとおり健康でペストには感染してないから大丈夫だ」と頼み込んだ。すると、「空いた部屋はないが、ベッドだけなら屋根裏部屋に一つある」ということで、メイドがその男を最上階まで案内し、二言三言言葉を交わし下に戻った。ところが彼女は、その男からエールを注文されたことを忘れ、そのまま翌朝になってやっと、人から言われて思い出し、別の人間が様子を見に上がってみると、男はベッドに斜めに身体を投げ出して服を引きちぎり、顎ははずれて目をむき、断末魔の形相も凄まく息絶えていた。（his Cloths were pulled off, his Jaw fallen, his Eyes open in a most frightful Posture）

男が部屋に入ったときは、全く自覚症状がなかった。しかしこの死にざまからみて、これは発症後ほんの数時間の間の出来事とみられた。多分、敗血性のペストだったと思われる。このような状況ではペストの感染は防ぎようがない。応対した召使いや使用人はもちろん、遺体の処理に関わっただけでも、大変危険なことであった。

宿中が大騒ぎになったことは言うまでもない。そして結果は悲惨なものであった。まだその頃は、イズリントンではペストが流行っていなかったのに、その週には（週最終日1665年7月10日）、町のペスト死者が2人報告され、その次の週（7月11～18日）には一気に14名にペストの死者数が跳ね上がった。

5.3 空気感染の恐怖

しかし、ペストが細菌によって伝染することが北里柴三郎とアレクサンドル・イェルサン（Alexandre Emile John Yersin）によって発見されたのは1894年のことで、1660年頃はまだ、毒性の気体（miasma）によって空気伝染すると信じている人も多かった。それで、たとえ少人数であっても会合や集会は禁止され、教会内での説教も、墓地での野辺の送りも許されなかった。説教は広い空き地で、会衆は数メートルずつ離れて立ち（social distance）、接触を避けて行なわれた。

また看護の家政婦は、長いメガフォンを逆さにした鶴の嘴のようなマスクをして患者の介護に当たり、ロンドン市長ジョン・ローレンスは、大きな特製のガラス・ケースの中に入いって人と面会し、外気を遮断して執務した。

蚤には強いんだと自慢していたピープスも、空気伝染ということには臆病なまでに気を遣い、6月17日（1665年）、偶々拾った辻馬車の御者が途中で突然発作に見舞われ、気分が悪くて立ってもおれず目も見えないと言うので、別の馬車に乗り代えて帰宅したが、あれはペストの発症による発作ではなかったか心配でたまらないと書いている。6月23日にも辻馬車を使って帰宅、だがこれも今や極めて危険な交通手段になったと、再度その危険性について書いている。事実、ロンドンのシティ当局の防疫指導条令でも、ペスト感染者を乗せた辻馬車は、5日から6日間大気に当てて消毒するよう命じている。

またペストは、その疫病の患者や死者の身体はもちろん、その着衣や持ち物に触れるだけでも感染し、さらに、それらが発する毒気を吸い込んだだけでも感染すると強く疑われたのである。天日に干し、燻浄し、焼却するなど、徹底した消毒、そして棄却が必要とされた。道端の落し物もペストに汚染されているかも知れず、うかつに手で触れると、それがもとで自分もペストに感染する惧れがあった。

このことについても、デフォーの『疫病年回想記』から、次のエピソードを紹介しておこう。

筆者H.F.が手紙を出すために郵便駅舎に行ったところ、中庭に鍵付きの革の財布が落ちていて、2人の男が話をしていた。もう1時間も前から落ちているのだが、落とし主が誰か分からないし、うかつに触ると危険なので、そこに放ってあるのだと言う。そこで、駅舎の窓から顔を出していたほうの男が、俺が拾って保管しておこうと言って家にはいり、桶に水を一杯汲んできて財布のすぐ横に置き、それからまた中に入って火薬粉を取ってきて財布の上にふりかけ、そこから線を引くように火薬粉を撒き、もう一度また家の中にはいって焼け火箸を持ち出してきて火薬の導火線に火をつけた。

火薬は財布を焦がし、また煙で空気も十分に消毒された。しかしそれでも満足せず、火箸で財布を挟み上げ、財布が焼け落ちるまでそのまま持っていた。それから水桶の中にお金をふるい落とし、家の中に持って行った。

何と大げさなことを、と思われるかもしれないが、新型インフルエンザが流行の兆しを見せたとき、マスクの着用、うがいの励行、入念な手洗いが、神経質なまでに指導され励行されたことを思い出すとよい。護摩を焚いてお払いをするというのも、根本の考えには相通ずるものがあるように思われる。疫病は、天から神が吹きおろされた懲らしめの大気によって運ばれると信ずる人もあったのであり、煙で町の通りを消毒すると言って、一日中松明を燃やし続けるよう条例で決められたことまであったのである。

5.4 家屋封鎖：阻止から封じ込めへ

また、ペスト患者がひょろひょろと表の通りに出てペスト菌をばら撒くのを防ぐため、監視人を置いて感染者の外出を取り締まることが必要であった。それでも、家屋封鎖を破って通りに飛び出た半狂乱の男が、「俺はペストだ」と荒れ狂い、オールダーズゲート・ストリートで行きずりの立派なご婦人に抱きついてキスをし、ご婦人はショックで卒倒し数日後に帰らぬ人となったというような無謀極まりない危険な腹いせ行為も起こったのであった。

1665年6月1日、シティでは、5月11日に死去した元ロンドン市長トマス・ヴァイナーの告別式が盛大に催されていた。しかし、その直近の死亡者統計週報は、ロンドン・ウォール外縁の教区もシティ郊外の教区も、すでにペスト汚染区域であることを警告していた。

シティのウォール内教区こそ発症者はまだゼロであったが、特にシティ郊外教区ではすでに2桁に達しようとする勢いであった。この事態に注意を向けず、多数の人間が集まる葬儀の集会をこの時期に催しているのは、ペスト拡大に対する判断に甘さがあったと言える。そのことは、ロンドン市長がペスト防止のための行動命令を決定したのが、1ヵ月後の

6月30日、施行が7月1日であったことからも覗われる。この間に、ペストの死者の届出のあった教区は5月末の5教区から、わずか1ヵ月に間に30教区にまで拡大していた。

1665年6月、ロンドンはペストに対する防疫対策を、水際での撃退・排除から封じ込めへと作戦転換しなければならない局面になっていた。The Orders of the Lord Mayor and Aldermenが公布されたのは1665年7月1日、すでにペストの流行が本格化し、早急の防疫対策の必要が誰の目にも明らかになってからであった。

その行動命令の一つ、Orders concerning loose Persons and idle Assemblieesの中で、多数の人間の集まる演劇、歌謡、熊いじめ、見世物競技などとともに、シティの業者組合による公的な宴席会合、旅籠や酒場での飲食の集まりを禁止しているが、遅きに失したところがある。オランダとの決戦に興奮し、そのため市民の日常への注意が疎かにされ、広がり始めたペストに対する対応が後手に回ったということがあったのではなかろうか。

6. ロンドン市当局の対応

6.1 ペスト防止条令の施行

6月に入り、ペストの流行が本格化し、早急の防疫対策の必要が誰の目にも明らかであった。ロンドン市当局はペストの拡大防止のため、ペストの発生が確認されたSt. Gile's-in-the-Fields, St. Martins, St. Clement Danesの教区では、すでにペスト患者の出た家屋の封鎖と監視を実施していた。

そしてこの家屋封鎖は、半世紀以上も前のジェームズⅠ世の時代に施行された法令を根拠にしたもので、その名称は「ペスト感染者の慈善的救済と保護のための法令」（An Act for the charitable Relief and Ordering of Persons infected with the Plague）という、何とも皮肉な偽善的な名称であった。（Defoe's *Journal*: 37）それは家屋の封鎖とともに、その家屋の居住者にも全員外出を禁止し、文字通りペストの封じ込めを図るものであった。

確かに、6月27日と7月11日の「死亡者統計週報」の統計を基にして『疫病年回想記』が言っているように、6月末のシティ内97教会教区のペスト死者は4人で、何軒かの家が封鎖措置になり、何人かのペスト患者がバンフィールドの北のペストハウスに送られた。その後、ペストの死者がロンドン全体で1,000人近くになったときでも、シティ内の死者は28人で一応健全な状態が維持され、シティのペスト封じ込め対策もそれ相応の成果を上げていたが、ロンドン市長と参事会は、1665年6月30日に新しくペスト防止条令を制定し、7月1日からそれを施行した。

このロンドン市当局のペスト防止実施要領は、Orders Conceived and Published by the Lord Mayor and Aldermen of the City of London, concerning the Infection of the Plague 1665と命名され、具体的には、以下の要員を各教区に配置することを定め、その任務を指示している。

- 教区ごとに指名された検査役
- およびその執務所
- ペスト患者の家屋とその住人の監視人
- ペスト感染者の捜査員
- 患者の治療担当の医師
- 患者に付き添いの看護人（看護家政婦）

続いて、彼らが遂行すべき職務が「疫病汚染家屋及び疫病患者に関する指導要領」（Orders concerning infected Houses, and Persons sick of the Plague）として、次の12項目が細かく規定されている。

- ペスト患者発生の報告通知
- 患者の隔離
- 家具寝具の空気洗浄
- 家屋の閉鎖
- 汚染家屋からの移動禁止
- 死亡者の埋葬
- 汚染家具寝具の持ち出し禁止
- 汚染家屋から人間の搬出禁止
- 汚染家屋の表示の厳守
- 汚染家屋の監視の厳守
- 同居者等の発症の場合
- 貸し馬車により患者を搬出した場合

そしてこの後に、道路の清掃、清潔維持に関する条例と、放浪者および無用の集まり・集会に関する条例があり、家庭ごみやごみ処理場のこと、乞食から飲み屋・芝居小屋のことまでが細かく指示されている。

さてこの条例の実施責任者は、各教区の代表参事とその代表代理および参事会によって指名された1名ないし数名の「検査役」であり、任期は2ヵ月以上で就任拒否は許されない。あくまでも拒否するときは処罰される。

「捜査員」は、ペストによる死亡者がいないかどうか、その発見に努め、死亡者があった場合は、地区担当の「外科医」と協力してその病因を確認し、「検査役」に報告する。ペストによる死者の出た家屋は、汚染が広がらないように封鎖され、家族は外出禁止、家財道具類の持ち出しも一切禁止、それを見張るために昼夜各1名の「監視人」を配備し、外部との接触は専らこの監視人を通して行う。家屋内に残された人間がペスト患者と接触するのを避けるため、専ら病人の介護・治療に当たる「看護人」が選任され、家政一般も代行する。

さて、ペストに感染の疑いのある病人が出たときには、それより2時間以内に地区の「検査役」に届け出ること、そしてその病人がペスト感染者と診断された場合は、その後の病人の死亡か治癒かに関係なく、その家屋を十分な保全処置ののち1ヵ月間封鎖すること、またその家屋に出入りした者の家屋も一定期間封鎖する。さらに、ペストハウスへの搬送の場合を除き、患者の他の家屋への搬送も一切禁止するということであった。従って死者の埋葬についても一項目が割かれ、ペストによる死者の遺体は、教会役員か警吏に内報して、日の出前か日没後に6フィート以上の深さに埋葬されねばならないと規定している。近隣縁者の会葬ももちろん不許可である。

このように、その条例の根幹に据えられているのは、ペス

ト患者が発生した家屋の完全な閉鎖であり、その他の項目はすべてそれに伴う処置である。ペストの拡散を防ぐために、ペストをその発生場所において封じ込めるという思想である。

6.2 Council Rules and Orders の公布（1666 年 5 月）

1664年末のペスト患者発生に対する迅速な対応に見られたように、1664年のうちは政府枢密院もロンドンのシティ当局も、検疫の厳格な実施など、ペストの上陸阻止のための水際作戦を効果的に進めていた。しかし、オランダとの緊張が高まり海外交易が縮小に向かっていたところへ、1665年2月の両国の宣戦布告によって海外貿易そのものが激減し、それに伴って厳重な検疫によるペストの監視体制も緩んでしまった。5月に入ってペストによる死者が「週刊死亡者速報」に報告されるようになっても、的確迅速な対応は取られなかった。

そして6月になっても、宮廷もシティもペストの流行阻止の動きは鈍かった。蔓延はすでに始まり、初動の遅れは彼らには明白なことであったはずである。6月5日のローストフト沖海戦の戦勝気分にしばし酔ったあと、6月20日の大勝利感謝デーもそこそこに一週間後の6月27日には、国王・貴族・宮廷が真っ先にロンドンから逃げ出した。ペストの阻止よりもペストからの逃避のことしか、彼らの頭にはなかったのである。それもそのはずで、週刊死亡者速報の6月のペスト死者数の急増は、彼らの心胆を凍らせるに十分であった。特にその第2週からシティ・ウォール内教区にもペストによる死者が出始め、完全にペスト汚染地区となっただけでなく、膝元のウェストミンスターでも、ペスト死者が猛烈な勢いで増え始めていたからである。彼らが内心パニックに陥っていたとしても不思議ではない。

1665年6月、シティ・ウォール内教区にもペストによる死者が多数出始め、完全なペスト汚染地区となっただけではない。シティ外の郊外教区、シティ・ウォール外縁教区に続き、膝元のウェストミンスターでも、ペスト死者が物凄い勢いで増え始めていたからである。彼らがパニック状態に陥ったとしても無理はない。だが許されないのはロンドンから転々と疎開先を変え、結局オックスフォードに落ち着き、議会を開会した後も、国王チャールズも宮廷政府もオランダとの戦争に注意を削がれ、ロンドンのペスト蔓延には、全く他人事のような態度であったことである。枢密院のメンバー9人の内6人までが国王に付いてオックスフォードに疎開しており、ロンドンに残っていた要職者はアルビマール公爵と大法官のクラレンドン伯爵、秘書長のヘンリー・ベネット卿ぐらいで、決定権のないアルビマール公爵モンク将軍が、留守番役の代表としてコックピットに頑張っていただけであった。

このような状況であったから、ロンドンから転々と避難先を変え、結局オックスフォードに落ち着いた後も、国王も宮廷政府もオランダとの戦争に注意を奪われ、疫病に対する対応はそれぞれの地域当局に丸投げで、公式の規制条令が出されたのが、なんと翌年の1666年5月であったとしても不思議ではない。そしてその内容も、1625年のジェームズⅠ世時代の対策指針を下敷きにして、それにペストハウス設営の義務化など若干の修正を加えただけの、おざなりな時期遅れの弥縫策の観を免れないものであった。

例えば、ペストに汚染の疑いある地域では、葬儀から祝賀の席に至るまで、すべて公衆の集会を禁止するという条項があるが、前年の6月20日に自分たちが、ローストフト沖海戦大勝利の祝賀祭を催したことには全く頬被りである。当時の週刊死亡者速報を一瞥するだけで、ロンドンに「ペストの疑い」どころか、「ペストそのもの」が広がりつつあったことは一目瞭然だったはずである。

そのような責任逃れの、時機を失した対策指令ではあったが、参考までにこの Privy Council Rules and Orders（枢密院公布ペスト規制条令）の大要を紹介しておこう。これらの項目の中には、すでに各地で実施されていたものが大半で、それを追認したに過ぎないが、すべての治安判事、首長に遵守を命ずるものであった。

- 各市町村への健常証明なき外来者の流入、物資の搬入の禁止
- 浮浪者・乞食の徘徊禁止
- ペスト汚染の疑いある地区での、すべての集会禁止。葬儀・通夜の集まりを含む
- 必要不可避の集会では大鍋にて火を焚くこと
- 公共の場及び家屋は清浄なること
- ブタ・イヌ・ネコ・ハトの放し飼い不許可。ただし殺処分は不要
- ペスト死亡者の埋葬は、十分な用地がないため高さ10フィートのフェンスで囲うことができないときは、教会及び教会墓地にての埋葬を一切禁止する
- 宿屋・居酒屋業の従事者に対する法律を強化する
- 各自治体はペスト患者隔離のための収容所を設置のこと。患者隔離後、当該家屋は40日間閉鎖する。これは患者と健常者の同時閉じ込めに反対の世論に応える措置である。

6.3 家屋封鎖の現実

しかし、自分はペストかも知れないと思っても、人間誰しも、そのようなことは公にはしたくないであろう。家族や使用人の場合も同じである。最後の最後まで判断を先送りにすることだろう。ましてや、それが家の者全員の拘束に直結することが明らかであれば、ペストに感染の疑いのある者が出ても、ぎりぎりまでそれを隠そうとするだろう。

だが不幸にして、一旦「要監視家屋」に指定されると、その家屋の居住者は全員が外出を禁止され、家屋の表扉には大きな赤の十字マークを張り付けられ、「主よ、我らを憐れみ給え」と大書される。脱出者が出ていかないか昼夜交替で「監視人」が見張りをする。家屋の清浄と本人の健康が証明されるまで少なくとも40日間、当該家屋の中に監禁され、この検疫期間を無事乗り切って初めて「健常者証明」が取得でき、社会に出ることが許される。

問題は、「要監視家屋」に指定された段階では健常者であった者も、感染の「可能性」が疑われる者として、ペスト感染者やペストン感染の疑いのある者と同一の家屋内に一緒に閉じ込められてしまうことである。しかしこれは、彼らに感染の危険に身を曝す生活を強要することであり、家族・同居者全員の監禁が厳しく実施されればされるほど、対象者は必死にそれから逃れようとする。これはは無理からぬことである。

このような逃亡の話をいくつも聞いたと『疫病年回想記』のH.F.は語る。その一人、オールゲートの商人の場合は、まるで脱獄と変わらぬスリリングな話で、若い女の奉公人がペストに罹り、そのため家の者全員にも屋内に拘留の命令が下される。友人を通じ、ロンドン市長、市参事に苦情を申し立て、この病人をペストハウスに入れることにも同意したけれども、結局、申し立ては却下され、家屋は封鎖されてしまった。

そこで主人は監視人に、病人は四階の屋根裏部屋で臥せっており、家の者は誰も彼女に近付かせたくはないので、病人の世話をする看護家政婦を連れてきてほしいと頼んだ。そして監視人がそのために出かけている間に、店の横壁に大穴をあけ、店の壁沿いに建っている外側の差し掛け小屋に抜け出すトンネルを掘った。差し掛け小屋は、店子の靴の修理屋が退散して今は無人だった。その晩はそのまま静かにしておいて、翌日また、今度は薬局に行って薬を調合してきてもらってほしいと監視人に頼み、その留守中に壁の穴をくぐり、差し掛け小屋の鍵を開けて一家全員で脱出。あとに残されたのは、四階の屋根裏部屋の病人と看護人だけ。監視人は驚き落胆したが、後の祭りであった。

だが監視人を責めることはできない。封鎖された家屋には出入り口が数箇所あり、すぐ通りに出られるものもあって、すべての出入り口を一人の監視人で見張ることは到底無理であった。しかも見張る相手は、迫りくる病魔の恐怖に必死の覚悟の住民であり、不当な扱いに憤る無実の市民であった。自分たちは何の罪も犯していないのに、ただ自分たちに地位も財力もないため、このように監禁されているのだと思うと、一層耐え難い思いに駆られたことであろう。ここには封鎖家屋と同じ数だけの監獄があったのである。

7. ペスト終息

ペスト菌が北里柴三郎とアレクサンドル・イェルサンによって発見され確認されたのは1894年のことであるが、家ネズミにたかる蚤に噛まれて、人間がペストにかかることは知られていた。人によって蚤や蚊に好かれる性質の人と好かれない性質の人がいるのは確かで、ピープスも「ポーツマスで仲良しのティモシー・クラークと一つのベッドで寝たが、蚤はみんな彼の方に行って俺の方には寄ってこなかった。俺は蚤に好かれない血液型だからペストにはかからない」と自慢しているが、私筆者は蚤にも蚊にも弱い。

だがペスト菌は、襤褸布や糞便の中でも1年は生き続けると言われ、ペストに対する最善の予防策は、一家にペストの感染者が出れば、患者を隔離して他の家族から引き離し、死者が出れば遺体を出来る限り迅速かつ適切に埋葬して、ペストの感染拡大を防ぐことである。またペストの患者や死者が出た家は、その家屋を閉鎖して周囲の家から隔離し、ペスト菌の拡散を防ぐことである。ペストに汚染される家が続けば、その一帯を封鎖してそれ以上汚染が周囲に広がるのを防止することも必要になるだろう。

だがこの恐怖の疫病が、ダービシャーのイームでは1666年の7、8月に二度目の猖獗を極めたあと、10月の11日をもって突然終息した。そしてそれより1年前になるが、ロンドンのペストも1665年8月から10月にかけて未曾有の猛威をふるったあと急速に勢いを失い、12月には各週とも死者は200余人に減少し、年明けとともに終息した。4ヵ月余の猛烈な猖獗のあとの突然の終息であった。

未曾有の猛威を揮ったペストが、なぜこのように突如終息したのか。その理由として、どぶネズミによる家ネズミの駆逐だとか、衛生設備の普及や健康管理の徹底などがよく挙げられるが、これらはいずれもその後の時代の生活環境の漸進的な改良によるものであって、1665～1666年のロンドンやイームのペストの突然の終息の説明にはならない。それはいかにも急激で劇的な終息であった。

事実、ロンドンでは1665年以降ペストの大流行を見ることはなかった。あの恐るべきペストはどこへ行ってしまったのか。その理由を1666年のロンドン大火による家ネズミの一掃に求める人もあるが、*Journal*のH.F.はその見解をとらない。大火で焼失したのはシティが中心部であって、ペストが最も猛威をふるったセントジャイルズ・クリプルゲート、セントボトルフ・オールゲート、セントボトルフ・ビショップスゲートは大火に遭っていない。対岸のサザックも同じである。大火がペストの汚染を一掃したのであれば、これらの区域でもペストの危険が消滅した理由の説明がつかない。

科学的な根拠のない素人の私の直観的な推測だが、好適な環境を得て大量に異常発生したものは、ペスト菌であれ、イナゴであれ、恐竜であれ、その余りにも過激すぎる増殖のために、自分で自分達の生きる環境の急激な劣化と縮小を招き、ある日を境に雪崩を打って共倒れの衰退に向かい、その勢いは加速して誰にも止めることができない。大量の異常発生は、環境の許容を超えた異常な増殖のゆえに、大量の突然死によってしか終わらないのではなかろうか。2倍、4倍、8倍と増殖を続ければ、増殖の場も2分の1、4分の1、8分の1にと急激に圧縮され、息苦しさに圧迫されて全員が一挙に衰退死するのが自然の理ではなかろうか。ペスト菌も同じであろう。そして我々人類も決してその例外ではないような気がする。

1665年を境にペストがロンドンから消えたというのは、後代の我々が知っている事であって、地方では1666年になって発生・蔓延をみたところも多く、対岸の大陸ではその後もペストの猛威は衰えを見せず、デフォーが*Journal*と*Due Preparations*を書いた1722年には、その前年からマルセーユでペストが猛威をふるっているというニュースが伝わり、ロンドンは戦々兢々としていた。ペストの終息はもちろん、ロンドンをあげての対応があってのことであろうが、翌年のロンドン大火が皮肉なことに、ペストの残滓と禍根一掃の手間を省いてくれたことは否定できないように思う。肝に銘じておくべきことは、ペストは決して封じ込められたのでも撃退されたのでも死に絶えたのでもなく、ただ忽然とどこかに去っていったのだということである。我々が彼らに打撃を与えたのでも、消滅に導いたのでもない。彼らは致命的な打撃を被ることなく自ら退いて行っただけである（Pestlence was not defeated, or contained—it departed）。彼らに好都合の環境が整えば、いつまた戻って来るかもしれない、別の形に姿を変え、人類の虚を衝いて、襲ってくるかもしれないということである。事実、その現実を我々は新型コロナウイルスの世界制覇を目前にして痛感させられている。